

# 「螢 Cruciana di Luciola」 のこと

萩原 義雄

## はじめに

日本の夏の宵の風物詩を饒るその一つに「ほたる【螢】」がある。少しく纏めてみる。

『日本国語大辞典』第二版に、「ほたる【螢】〔一〕〔名〕①ホタル科に属する甲虫の総称。体長六〜一八ミリ<sup>㍉</sup>。体は長舟形で柔らかい。夜光ることよく知られているが、発光する種はわずかである。日本ではゲンジボタル、ヘイケボタルヒメボタルなど約四〇種が知られ、特に前二者は有名で、螢狩りの対象とされ飼養もされる。この二種の幼虫は水生であるが、これは世界でも例外的で、ほとんどは林床にすみ、カタツムリ類を食べる。古来、文学作品などによく現われる。くさのむし。なつむし。ほたる。ほうたる。学名は Lampyridae (Luciola cruciana, Cruciana di Luciola) 《季・夏》②埋火などの小さく消え残った火。ほたるび。③(夜になると現われるところから)江戸時代、京都祇園のあたりで通行人の袖を引いた下級遊女。また、その茶屋。ほたる茶屋。④盗人仲間の隠語。イ火または火縄をいう。〔隠語輯覧(1915)〕口火縄で錠を焼き切ることをいう。〔隠語輯覧(1915)〕ハ星影をいう。〔隠語輯覧(1915)〕〔二〕「源氏物語」第二五帖の巻名。源氏三六歳の五月、源氏が螢の光で玉鬘の姿を兵部卿宮に見せること、源氏の物語論、夕霧と雲井雁の恋などを配しながら、玉鬘にひかれていく源氏の心や、玉鬘をめぐる人々の動きなどを述べる」と記載。\*用例は省く。



## 一 中国における「螢」という名

### 字書における「ほたる」

『爾雅』釋蟲に、「熒火<sup>㇀</sup>即炤」。『爾雅疏』に、「熒火一名即炤、夜飛腹下有<sup>レ</sup>火蟲也」。

『説文』に、「熒屋下燈燭之光从<sup>二</sup>焱<sup>一</sup>」(「熒」の文字は「焱」と「宀」の合字、家屋のもと燈燭の光の意)。『玉篇』「蠖」「蠖」。

『字彙』に、「熒燈燭之光、又借爲<sup>二</sup>熠燿<sup>一</sup>、蟲名別作<sup>レ</sup>螢」

『康熙字典』に、「熒又與螢通」

### 漢籍における「ほたる」

『呂氏春秋』に、「季夏涼風、始至腐草、化爲<sup>レ</sup>蚺」。

『詩經』に「東山曰、熠燿<sup>㇀</sup>宵<sup>㇀</sup>行」。

『禮記』「月令曰、季夏之月、温風始至、腐草爲<sup>レ</sup>螢」。

『大戴禮』に、「夏小正曰、丹鳥<sup>㇀</sup>羞<sup>二</sup>白鳥<sup>一</sup>丹鳥者謂<sup>二</sup>丹良<sup>一</sup>也白鳥者謂<sup>二</sup>蚊蚋<sup>一</sup>也」。『大戴禮』に、「丹鳥」「丹良」とほたるの異名表記。

《補遺：参考資料》中国の書籍を引用する鎌倉時代の『塵袋』、室町時代の『塏囊鈔』

一九八 丹鳥。白鳥ナト云フ。コレ又何レノ鳥ソ。黄鳥トモ。丹鳥トモ云フ。コレホタルノ名ナリ。丹良トモ云フ。尔雅ニ云。螢火一名ハ。丹鳥。又ハ礼記注ニハ。謂<sup>レ</sup>丹良ト。トリト云事ハ。虫ナレトモ。ハネノアリテトフハ鳥ニニタル故ヘニムシヲモ鳥ト云フ。礼記ノ註云。有<sup>レ</sup>翼者<sup>㇀</sup>爲<sup>レ</sup>鳥ト云云。大戴礼ノ小正ニ云。黄鳥ハ。丹良也。然則虫也ト云ヘリ。白鳥ト云フハ。人ヲク

ラフ蚊也。同書云。白鳥ハ。蚊虫罔ナリト云々。〔『塵袋』卷四、獸虫二九九～三〇〇・155〕じが【爾雅】らいきちゅう【禮記注】

二〇二 ホタルヲクチクサト云フハ草ノクチテ螢トナル心歟。 礼記月令ニ腐草為螢ト云ヘリ。是又フルキ事ナリ。詩ニモ哥ニモ此ノ意アルヘシ。但シ鱗トカキテホタルトヨム事モアリ。コノ字ヲ釈スルニハ馬ノ血為<sup>テ</sup>螢ト云ヘリ。サレハ、ムマノチノナルト云フ説モアルニコソ。腐草化為螢。〔『塵袋』卷四、獸虫三〇四～三〇五・157～158〕フサウ【腐草】蟋蟀居<sup>レ</sup>壁、鷹乃學<sup>レ</sup>習、腐草為<sup>レ</sup>螢。《禮記・月令第六・上246》

・丹鳥。白鳥ト云ハ。何レノ鳥ソ。○共ニ是非<sup>レ</sup>鳥<sup>ニ</sup>。丹鳥ハ。螢ノ名也。又黄鳥。丹良。燭夜。燿燿ナント云也。爾雅ニハ。螢火ノ一名ハ。丹鳥ト云リ。大戴禮ノ小正ニ曰。黄鳥ハ。丹良也。然則虫也ト。禮記ノ註ニハ。謂ク丹良ト者丹鳥也。鳥ト云事ハ。虫ナレ共。羽ノアレハ也。サレハ禮記ノ註ニ。有<sup>レ</sup>翼者<sup>ヲ</sup>爲<sup>レ</sup>鳥ト云云。大師ノ三教指<sup>レ</sup>皈ニハ。數十ノ燿燿ノホタルトヨメリ。又和語ニ。螢ヲ。クチクサト云。是詩歌共ニ。可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>詞也。禮記ノ月令ニ曰。腐草爲<sup>レ</sup>螢ト云云。又鱗ノ字ヲ螢トヨム。此ヲ尺スルニハ。馬ノ血爲<sup>ス</sup>螢ト云リ。サレバ馬ノ血ノ螢ニ成ト云ハ。由有事也。又狐火ヲ。鱗火ト云事アリ。此鱗ノ字ニ。馬ノ血ノ心アリ。此ヲ以テ。世俗ニ。狐火トハ。馬ノ骨ヲ燃ナント申ニヤ。次ニ白鳥トハ。蚊也。大戴禮小正ニ曰。白鳥ハ。蚊虫罔也ト。俗ニ鵲ヲ。白鳥ト云ハ。只其色ヲ指ス歟。未タ其本説ヲ不<sup>レ</sup>見。〔『壺囊鈔』卷第五60・二〇〇頁、171頁20オ⑦〕

※『壺囊鈔』の内容は、前の書『塵袋』の一九八と二〇二とを合併させたものであり、ここで、増補している箇所は、本朝の弘法大師『三教指歸』の文言と「狐火」の文言の二点。である。

## 二 日本における「ほたる」の名

『日本書紀』神代紀下卷「<sup>ホタルヒノカハヤクカミ</sup>螢火光神」。

『萬葉集』卷十三、夫の旅に在りて死たるを悲みて妻の詠める詩「<sup>ホノカニキ</sup>過行跡玉梓之使之云者<sup>イウヨウ</sup>螢成<sup>ホタルナス</sup>髻鬢聞而云々」※『萬葉集古義』に、「螢成は幽の枕詞なり。如<sup>レ</sup>螢といふ意なり、髻鬢聞而は死て去ぬと使の云ふを幽に聞てなり」。

『新撰字鏡』に、「鱗、𦉰、𦉰 保太留」。

『倭名類聚鈔』(十卷本・八)に、「<sup>ホタル</sup>螢兼名苑云<sup>ホタル</sup>螢<胡丁反>一名燿燿<上一入反下弋照反與燿同>和名保太流」。

『本草和名』に、「<sup>ホタル</sup>螢火 和名保多留」。

観智院本『類聚名義抄』に、「<sup>ホタル</sup>螢 音熒ノホタル」〔僧下22①〕。「<sup>ホタル</sup>螢 音勞ノホタルヒ」〔佛下末38⑥〕。「<sup>ホタル</sup>鱗 俗鱗字ノホタルヒ」〔僧下37⑤〕。

『伊勢物語』に、「行く<sup>ホタル</sup>螢雲の上までいぬべくは秋風ふくと雁に告げこせ」。

『大和物語』

清少納言『枕草子』に、「夏は夜、月の頃はさらなり。闇もなほ螢飛びちがひたる雨などの降るさへをかし。」夏の夜の清趣の一半とす。

紫式部『源氏物語』帚木の巻「風涼しくて、そこはかとなき虫の声々聞こえ、<sup>ホタル</sup>螢しげく飛びまがひてをかしきほどなり。」螢の巻「<sup>ホタル</sup>螢を薄きかたに、この夕つ方いと多く包みおきて、

螢  
ホタル  
ホタル



光をつつみ隠したまへりけるを、さりげなく、とかくひきつくろふやうにて。にはかにかく掲焉に光れるに、あさましくて、扇をさし隠したまへるかたはら目、いとをかしげなり。」

和泉式部の歌「物おもへは 澤の**ほたる**も 我身より あくかれ出る 玉かとそ見る」(図絵)

### 三 「ほたる」の語源

江戸時代の貝原益軒『大和本草』卷十四に、「**螢**火、ホは火なり。タルは垂也。下體光る故名とす」。『和訓義解』に、「**ホタル**とは此虫の身より火垂るる義也」。『和訓栞』に、「ホタル、**螢**を訓せり。ホタル火照の義なり」。『俚言集覽』に、「**螢**、ホタルは火照の義ならん、萬葉集十一咲出照是照をタルと訓る徴也」。新井白石『東雅』に、「一**ホタル**とはたとへば爾雅に**螢**火即炤と見えし如く、ホは火也タルは炤也、テルといひタルといふは轉語なるなり、萬葉集抄にホトロといふ言葉を釋してホトロとはヒカルといふ詞なり、ヒカル蟲をホタルといふが如しと見えし即是也」。大石千引『言元梯』に、「**螢**、火光」。『和訓六帖』に、「**螢**、火足ヒタル也也」。小野蘭山著『本草綱目啓蒙』に、「一説に星垂の意なりと云へり、秘傳花鏡に群飛天半猶若小星の文あり」という説が見えている。瀧澤馬琴『燕石雜誌』卷一・物の名の條に、「ほたろは、火太郎なり。泥鼈を沼太郎といふにて知るべし」同じく卷五下、螢鼻の條に、「**螢**の訓父太郎なるよしは既にいへり、再按するに唐山にて螢の別名を丹良といふより、たろと丹良と音近し、これらはその義おのづからかよへり」という説もある。また、近代国語辞書である大槻文彦編『言海』には、「ほたる、火垂ホタルの轉或云、火照ほてるの轉、訛してホタル」と見えている。

#### 「ほたる」の異名

「夏虫」は、『後撰集』に「つゝめどもかくれぬものは夏虫の身よりあまれる思ひなりけり」

「ちくさ」は、上記『禮記』月令の「**腐草**爲**螢**」に依る名。

「夜半草」「夜をしる虫」は、和歌連俳『異名分類抄』に記載。

「ほたる」の方言としては、小野蘭山著『本草綱目啓蒙』に、「ホラロ京、ホウタロ播州、ホウタレ越前」とある。

### 四 「ほたる」の生成譚そして季節

#### 「ほたる」の生成

『堀川百首』匡房の歌に、「五月雨に草の庵は朽れども螢と成ぞ嬉しかりける」と詠み、室町時代の古辞書『下學集』に、「**螢** 腐草化成ホタル **螢**ト者也」〔氣形門67④〕。廣本『節用集』「**螢** ケイ 腐草化成ホタル **螢**ト者也。又鱗同。般腴屢合紀。異名丹鳥。丹良。丹夜。熠燿。夜遊女。宵燭。即照。夜光。暉夜。宵行。景天。莎雞。腐草。火虫。銀星。飛火。草化。良夜」〔氣形門97④〕、易林本『節用集』「**螢** 腐草化作一也。熠燿。」〔氣形門30⑦〕そして、江戸時代の『和漢三才圖會』は、「腐草化して螢となる」の説を記載している。ただ、江戸時代の本草学者小野蘭山は、『本草綱目啓蒙』に、「凡螢は夏初油菜科を刈の候、多く出大中小の三品あり。皆水蟲より羽化して出夏後卵を生して復水蟲となる。腐草化して螢となるに非ず。雄なる者は光大なり。雌なる者は光小なり、川の大小を問はず年中水の斷ざる川筋に多し云々」とその生態を明らかにしたのである。

#### 「ほたる」の季節

中国では、『易經』通卦驗に、「立秋腐草化爲**螢**」。『爾雅疏』に、「月令季夏、腐草爲**螢**、腐草此時得暑濕之氣故爲**螢**、至秋而天沈陰數雨、**螢**火夜飛之時也」。『呂氏春秋』に、「季夏涼風、



始至腐草、化爲<sub>レ</sub>蚋ハエ」として立秋の後とする。

そして、藤原公任撰『和漢朗詠集』<sup>ホタル</sup>螢・元稹の詩「<sup>ケイワミダ トン</sup>螢火亂れ飛で秋已近し、<sup>アキスデニチカ</sup>辰星早く没して夜初めて長し」とあって、初夏の景物なるにも拘わらず、文学上では、秋近き頃とし、歌物語『伊勢物語』には、「行く<sup>シンセイハヤ</sup>螢雲の上までいぬべくは秋風ふくと雁に告げこせ」と詠じ、『新勅撰集』に「白露の玉江の葦のよひ／＼に秋風近く行く<sup>ホタル</sup>螢哉」、鴨長明『四季物語』第七に、「せこが衣もうらさびしきに秋風吹き始め、萩の葉もそよ更に、をり知り顔にうち靡きて夕々は螢みだれ飛び思ひさうせん」と悲しく思ひなされて云々」とし、室町時代の『義経記』静吉野山に捨てらるゝ事に、「西を指して行く程に、遥なる深き谷に燈火幽に見えければ、如何なる里やらん、賣炭の翁も通はじなれば、唯炭竈の火にてもあらじ。秋の暮ならば、澤邊の螢かとも疑ふべき。斯くて様近づきて見ければ、藏王権現の御前の燈籠の火にてぞありける」と記載する。

これらは、実に奇妙なる季節感として「螢」を描写していることに気づくのである。初夏の風物詩と定まるのは、清少納言『枕草子』から時代も降って江戸時代に成ってからということになる。

因みに、『日次紀事』五月の條に、「小満後四日五日之間、江州勢田併宇治川、西加茂、北宇喜田社及水上村、螢多出是亦一時之壯觀也」、『東都歳時記』五月の條に、「螢、立夏の後四十日頃より」と記載され、現代に至っては、初夏の風物詩と定着を見たということになる。

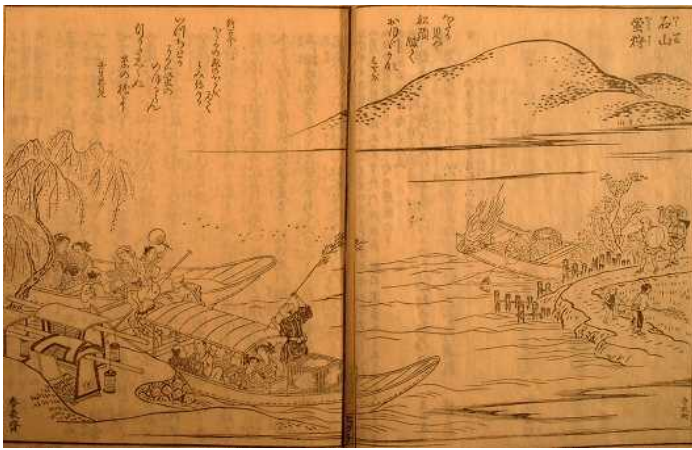
## 五 「螢狩り」とその名所

江戸時代の川柳に、「一疋の螢でくづす門涼み」「涼み臺みんなたゝせて螢にげ」と夏の涼感を誘うのであるが、「螢狩り」こそが夏の清遊として古くより行われ、先に引用した鴨長明『四季物語』第五に、「そのかへり申しに石山に詣でぬ、かへさには螢いくそばく、薄衣の器に包み入れて宮の内に奉れば、こゝの御簾或は御局のそこらに數多放されて晴るゝ夜の星とゝのせしも、いひしらず思ひたどりぬ。されどこの虫も夜こそあれ晝は異様に夜の光にはけをされて劣れる虫なり、まいて手に觸れ身に添へては悪しき香うつり來ぬ、手に蘭を握り身には百壽の香を塗る若へ、君の前にては心あるべき虫の香ならし」として、鎌倉時代の「螢狩り」の様子が知られるのである。この「薄衣の器」は「螢籠」であり、その製を喜多村信節『嬉遊笑覽』に「紗など貼たる籠なるべし」と記載し、江戸時代の川柳に「來年は螢籠だと親仁着る」「絹の羽織螢が着るとしまひなり」と見えている。

《補遺》小学館『日本国語大辞典』第二版

ほたる - かご【螢籠】〔名〕螢を入れるためのかご。《季・夏》\*俳諧・白馬〔一七〇二（元禄一五）〕上「螢籠提て聞夜や後夜の鐘〈半残〉」\*雑俳・柳多留 - 九〔一七七四（安永三）〕「來年はほたるかごだとおやぢ着る」【方言】植物、ほたるぶくろ（螢袋）。《ほたるかご》山口県吉敷郡 803 発音】ホタルカゴ〈標ア〉[ル]【辞書】言海【表記】【螢籠】言海

ほたる - がり【螢狩】〔名〕夏の夜、水辺などに光る螢を捕えて遊ぶこと。ほたるおい。《季・夏》\*浮世草子・好色産毛〔一六九五（元禄八）頃〕三・二「上鴨の<sup>ホタルガリ</sup>螢狩、宇治瀬田は更也、北野平野に勝て、市原二の瀬の柴口鼻が帰る夜道をかがやかし」\*俳諧・新類題発句集〔一七九三（寛政五）〕夏「宵闇や扇ひらめく螢狩〈如酒〉」\*浄瑠璃・生写朝顔話〔一八三二（天保三）〕宿屋の段「都の辰巳宇治の船、こがれよるべの螢狩」【発音】ホタルガリ〈標ア〉[ル]〈京ア〉[ガ]【辞書】言海【表記】【螢狩】言海【図版】螢狩〈都名所図会〉



『東海道名所圖會』より

『伊勢參宮名所圖會』より

その江戸時代の「螢狩り」の様子は、正徳二年版『和漢三才圖會』に、「江州石山寺溪谷名二試之谷-螢多、而長倍-干常-、因呼其處名-螢谷-、北至-勢多橋-、二町許南至-供江瀬-二十五町其間群飛高十丈許、如-火焰-、或數百爲塊、從-每芒種後五日-至-夏至後五日-凡十五日爲盛、無-風雨-不-甚晴-夜愈多矣、但北限橋東限川、嘗不有之、又過時節則全無之」と詳細に記載されている。

また、京師洛外の俳人秋里籬島編『東海道名所圖會』(寛政七~九(1795-97)年)卷二・石山寺に、「卯月さつきの頃ハ螢見とて河の面の船遊びに三弦の音今様の声棹の哥につれて黄昏をまちて大日山より飛出る螢幾千萬の數しらず名産とて石山の螢は他所よりも極て大キク光も強しこれ風土の奇也」と記載し、安永の『笈埃隨筆』に、「此邊の螢見といふは暮ぬ前より舟を出し名にしおふ螢谷より石山寺を下り黒津の里に行て大白山とて湖中に差出たる小さき山有り。其山の汀に舟をよせて遊ぶに既に日暮ぬとするころほひ湖邊の草の葉末より一同に飛立て散亂するは誠にたぐひなき壯觀なり」と記載している。貝原益軒『岐蘇路記』下巻にも、「螢谷は勢田と石山の間也。四月下旬の比、此の谷より夜ごとに螢おびたゞしく飛出て橋の南北に飛び散り數萬の螢一所に集り丸くかたまりて空に上り其かたまり水の上に落ちて散るといふ毎夜かくの如し」と記載が見られ、「石山螢合戦」を伝えたもので、これは『和訓栞』螢の條に、「今宇治瀬田の邊に多く集まりて團をなして水中に入る事あるを俗に合戦といひならはせり」と称していることでも知られる。

宇治の螢狩りは、『續山井』に、「火廻しか瀬田から宇治に行螢衆下」とし、源三位頼政の家集に、「いさやその螢の數はしらねども玉江の蘆のみへぬ葉ぞなき」と鳥羽院の北面會に江上螢多といふことを詠める歌があり、江戸時代の浄瑠璃『朝顔日記』にも「ひとせ宇治の螢狩り」と表現されていて、『嬉遊笑覽』の「螢合戦は狂歌咄に卯月の末つかた宇治こは螢の集りえならぬ興を催せり。餘所の螢よりは一きは大にして光りことさらにみゆ、世に頼政入道が亡魂にて今も軍する有様とて夜に入ぬれば數十萬の螢川面にむらがり或は鞠の大き、或はそれよりも猶大に丸かりて空にまひあがり、とばかり有て水の上にはたと落てはら／＼とけて流れ行こと幾むらとも限りなし」と表現されている。俳句としては小林一茶が句に、「和睦せよ石山螢瀬田螢」とあるものである。



他に、螢狩りの名所として、『雍州府志』卷六に、「近世洛人專賞-螢火-五月始、上賀茂併水上村、北野西平野、特多入夜行觀之又執而入-紗籠-掲檐而玩之」とあり、江戸では、『東都歳時記』卷二に、「王子邊、谷中螢澤、高田落合姿見橋邊、目白下通、目黒邊田畑、吾妻森邊、隅田川堤、其外名所あり。都下の游人黄昏より漫遊し、籠中に入て家裏とす」と記載している。

また、西国にても秋里籬島編『攝津名所圖會』(寛政十(1798)年刊)第五冊・白井螢見「郡村白井の

水辺に初夏の末より螢多し。土人云、天正元年中明智日向守光秀が一族戦死の鬼火也といふ」とし、「白井螢狩」の圖會を載せている。さらに、第拾冊・敦盛石塔には、「螢火やまねく扇の風の前 衆雲」の句を記載する。

## 六 「ほたる火」の利用

中国の故事「螢雪の功」の起こりとする、『晉書』の「車胤字武子幼恭勤博覽、貧不常得油、夏月以練囊盛數十螢火、照書讀之以夜繼日、後官至尚書郎」があつて、よく知りうる場所である。本邦では、後堀川院の御代の譚として『秋夜長物語』に、「例の童さきに立て魚腦の提灯に螢を入てとしたり。其光かすかなるに」としている。『伊勢物語』には、「美しき人を見むと車中に螢を放つ」話しが知られる。戦国時代の毛利元就が尼子氏征伐の時、夜軍を潜め水濱を行く際、左右の者に指し語り云うに、「飛螢火を蔽うて遠近断えざるに、彼處に断えるあり、一螢だも飛ばざれば、此れ必ず伏兵なりと左右の者に探偵せしめた處、果たして伏兵あり、撃て之れを破る」という話しが『百物叢談』に記載されている。

醫藥としては、『廣益本草大成』に、「螢火明目療清盲、辟鬼惡邪毒蟲、治小兒火瘡」とし、『本草綱目』には、「螢火能辟邪明目、蓋取其炤幽夜明之義耳」とし、同所「神仙感應篇」を引用し、「務成子が螢火を以て丸と爲した螢火丸は、主辟疾病惡氣百鬼虎狼蛇虻蜂蠆諸毒五兵白刃盜賊兇害」とし、「螢火丸」の故事が描かれている。

## 七 「螢」を鳴かす譚

『後拾遺集』夏、源重之の哥「音もせで思ひにもゆる螢こそ鳴く虫よりも哀れなりけり」※俗謡「戀し戀しと鳴く蟬よりも鳴かぬ螢が身を焦がす」の本歌となつたている。

鳴かぬとされる螢を鳴かすのは、太閤羽柴秀吉にて『常山紀談』卷十一、秀吉公連歌の事

秀吉或時紹巴に向ひ吾發句せん、汝脇句せよとて

奥山に紅葉ふみわけ鳴く螢

とせられしに、

しかとも見えぬ燈火のかげ

脇、紹巴の句なり、紹巴螢は鳴蟲に候はずと申す。秀吉聞きて螢に聲なくとも吾鳴かせずしてやあるべきと云はれし時、細川幽齋かたへより、

武蔵野や篠を束ねて降る雨に 螢より外鳴く虫もなし

とよめる歌の候といはれければ秀吉悦ばれけり、此歌は螢の聲ありと

いふ心にはあらず、雨降る夜は皆虫の鳴止むなれば光の見ゆる螢より外虫なしといふ事なりといった秀吉公の興ずるところに、時に応じて幽齋の頓智が効を奏したものである。



## 八 落咄に「螢火の熱」

寛政十二年版『落咄申の人真似』(中本五冊)に、

「おつねさん、お前の鬚に螢がとまつて居るぞへ、それ／＼首筋へ這入るわナ」、「オ、わたしやいや」と首筋へ手をやれば、螢が指先にひいやりと觸われれば、「オ、あつ」

といった「落咄」が見えている。この「おつねさん」の名を顛倒語にすると「ねつ【熱】」で「螢火」を連想させる縁語調とでも云うのか、「いや【嫌】」も同様に「やく【焼】」の連用形「やい」である。そして落ちのくだりは、「ひいやりと」と「オ、あつ」と対表現を見せているのである。実際、「螢火」は触っても熱くはないのだが……、こうした趣向に発展したことに妙味を

覚えるのである。

## 九 現代歴史小説に見る「螢狩り」

(1) 浅田次郎原作『壬生義士伝』下〔文春文庫所載〕に、「螢狩り」は「壬生の夏」と二度描写されているが、今茲に後の描写場面を紹介しておく。故郷、岩手県盛岡に向かう車中での吉村貫一郎(東京帝国大学教授(先年退官)農学博士。生年は文久二年、壬戌、今年で算えの五十四、名前は、母親が思いのたけをこめて付けてくれた、見知らぬ父の名と同じ)の回顧描写に、以下の如く表現されている。この場所は、彼が八歳の冬まで過ごした雫石村である。

ある夏の夕暮れどき、伯母が子供らを残らず連れて螢狩りに出たことがありました。

朝早くから日の落ちるまで、ずっと機を織っている伯母が、子供らの遊び相手をするというのは珍しいことでした。

ほうほう、螢こい

行灯あんどんの光をちょいと見てこい

ほうほう、螢こい

—そんな歌を唄いながら、提灯や竹の枝を持って螢を追うのです。

土橋を渡した小川の岸边には、目のくらむような螢の群が飛びかっていた。姉や従兄たちの真似をして私も懸命に螢を追ったのですが、なかなか捕まえられない。するとそのうち、運の悪い一匹が向こうから私の着物の袂たもとに飛びこんできたのです。

掌におさめて、あかあかと息づくように燃える螢火を覗きこんだときは、胸が高鳴るほど嬉しかったものです。

ふと、母の寝間に放してやろうと思った。灯りも窓もない小部屋で、ぼんやりと臥せている母に、螢を見せてやろうと思ったのです。それで、誰にも告げずに家へ駆け戻った。

《中略》伯母が子供らを螢狩りに連れ出したのは、そういう兄の姿や母との別れを、見せたくなかったからなのでしょう。《中略》思いつかぬ慰めのかわりに、私は掌の中にしまっていた螢を、寝間の闇に放ちました。母を泣きやませたものは、私の抱擁ではなく、闇に舞う螢火でした。

五十年の時を経た今でも、床に就いて闇を見つめるたびに、あの夜の螢火が思い出されます。

母と添寝をした記憶は、その一夜ひとよきりでありますから。

(2) 三浦しをん『神去なあなあ日常』〔徳間文庫 2012年9月刊〕に、

「ほら」

とヨキが指さす。目をこらすと、かすかな明かりが浮かびあがった。薄黄緑の小さな光が、水田のうえを飛び交っている。

「何度見ても、きれいなもんやなあ」

みきさんがうっとりした声で言った。

「はじめて見た」

と、俺は言った。

「はじめて?!」

ヨキはびっくりしたようだ。「今年のはじめてじゃなく、生まれてはじめてか?」

「うん」

螢——それも自然発生した螢なんて、俺の生まれ育った街には一匹もいなかった。

なんだか不思議な虫だ。近くの稲にとまった螢を、顔を近づけて眺めてみる。淡く光ると、小さく黒い虫の姿が一瞬だけあらわになる。本当に尻が光っている。すぐに闇に溶けこみ、また光る。

炎とも電気とも星や月や太陽ともちがう、これまで見たことのない色と質感の光だった。輪廓があやふやで、触れたときの温度を想像しにくい。冷たいようでも、火傷しそうでもある。そういう光が、**ふわふわ**漂ったり静止したりしながら、田んぼのあちこちに灯っている。夜を少しだけ照らしだす。〔151頁⑭～152頁⑮〕

とあって、都会生まれ育ちの主人公勇氣にとっては、本当にはじめて「螢」の光る光景を目にしたの感慨を「炎とも電気とも星や月や太陽ともちがう、これまで見たことのない色と質感の光だった。輪廓があやふやで、触れたときの温度を想像しにくい。冷たいようでも、火傷しそうでもある」と描写する。「見たこともない色と質感」で、触れようとする「冷たいようでも、火傷しそうでもある」という五感すべてこの生き物の生態を知ろうとする主人公の好奇心を斯くも見事に表現していると云えよう。そして、この勇氣の感覚は都会っ子すべてに同化していくことにも繋がっていくのであるまいか。

《已上》